



## 巻頭言

会長 牛田 三千子



大阪IIゾンタクラブの創立メンバー20数名が初顔合わせをした13年前のことを思い出します。ゾンタのこともよく知らないままリーガロイヤルホテルの一室で緊張しながら座っていました。その初対面のメンバーの大半が13年後の今なお同じクラブの同志として、また信頼できる友としてともにクラブライフを送ることができるとは、その当時想像してはいませんでした。これは嬉しい予想はずれといえるでしょう。

徳光さんの後任としてこの2年間会長を勤めさせていただくことになり少々緊張しています。しかし20名たらずの小クラブでは誰が会長だとか誰が役員だとかは関係ないともいえます。一人ひとりがなくてはならない貴重な人材であって、誰が欠けてもクラブは成り立っていかないのですから。その心暖かいメンバーに支えられて会長の仕事を楽しんでできればと思っています。

4月に2週間イギリスを旅行しました。田園地方ののどかさや美しい自然を保護していこうとするナショナルトラストの努力など、学びたいものがたくさんありました。お会いした何人かのかたは皆親切で礼儀正しくむしろ内気なぐらいでした。大英帝国の時代から多種多様な文化と共存してきたからでしょうか自分の考えはしっかり持ちつつ同

時に他者の考えも自分のそれと同様にしっかりと尊重する、という懐の深い大人の社会だと感じました。それが成熟した人間であり成熟した社会だといえるのでしょうか。

日本人は容貌も言葉も単一ですからどうしても同一化を求めがちですが、「人は違って当たり前」という基本認識ができる人が多くなれば少数派にももっと優しい社会になるのではないのでしょうか。

最近の日本とアジア諸国とのぎくしゃくした関係をみても自分の主張ばかりを声高に述べ立てるのではなく、お互いちょっと相手の立場にも配慮すればもうすこし関係もスムーズにいくのではないかと感じます。

国際組織であるゾンタインターナショナルのなかで、大阪IIゾンタクラブはほんとうに小さな一組織にすぎません。しかしその小さな細胞が思いやりを持った大人のクラブであることがなにより大切なことだと思います。大阪IIゾンタクラブはそんなクラブであるし、これからますます理想にむかって努力できるメンバー揃いであると信じています。



第7回 エリアⅣ エリアミーティング

2005年5月14日 於新神戸オリエンタルホテル

徳光 正子



風薫るさわやかな五月。第7回エリア4エリアミーティングが、新神戸オリエンタルホテルで開催された。県知事はじめ、本部から、又、エリア1からもたくさんのご来賓がご臨席下さる中、いつもながらの後藤ディレクターのあたたかいご挨拶でなごやかにスタートをした。大賀ガバナーからは、106名会員増強という嬉しいご報告をいただいた。これは世界のトップ3に入るとやらで、日本女性のパワーとエネルギーを再確認し、ゾンタ活動への更なる展望が開かれた様で大いに励まされた。地区アワードは、我が親クラブ大阪Iゾンタクラブが選ばれ荣誉に浴され、まことにおめでたいことである。ビジネスセッションは、244名出席、23クラブ、定足数25で進行し、プログラムの承認、第6回エリアミーティング議事録承認、2004年度のディレクター活動報告、収支中間報告と続いた。

協議事項においては、①義援金の扱いについて各クラブで検討し次期ミーティングにて方針を決めることになった。②ゾンシャンのネットワーク作りのためにも講師登録を各クラブ毎にまとめて提出すること、③お祝い金は以前に決められたとおりやめて登録料で処置することをエリア通信にてもう一度通達をする、④エリア4に事務局が欲しいとのことであった。この件に関しては、地区分割とも関係してくるので地区大会後に改めて検討することとなった。

大賀ガバナーからは、国際ゾンタの奉仕と目的、内容について今一度解りやすくレクチャーして頂き、私などここに至って基本的な事象を確認した次第である。

国際ゾンタは新クラブの設立を希望しており、若い力を導入してゆくためには、時間、労力、経費等の節約も必要となってくるとのことでITシステムを採用する方向に進んでいる。分割の件についてはエリアミーティングは、ワークショップ勉強の場であるので、次期地区大会において議論されることになるだろうと。又、6年に渡る国際の指導もあるので、おそらく、日本は2分割として提案をすることになるとのことであった。

関 地区書記からは、「地区ルールについて」とのテーマで、地区大会の登録、プロデンシャルプロキシー、提案方法や、分割後の件についてもご説明いただいた。次期、地区大会は、今後の活動に関して色々と活発な議論がなされることだろう。新しい時代に期待したい。



パネルディスカッション

「今、子供のためにできること」を聞いて

橋本明先生の講演後、精神科医、小児科医、教育者の方々のディスカッションがありました。人権を尊重され大事に育てられた子供、信頼感を持っている子供を育てることです。親は子供のモデルを形成し、毎日の暮らしの中で学習していきます。「どんな大人に出会うか！」1人の大人でも良い、生みの親でなくてもいい、その子の人生を導けるEffect（効果）を与える大人が必要です。そんな大人になって、1人の子供の役にたてる人間になりたいものです。

Attachment（基本的信頼関係）ができていないと、Stressがあった時、うまく対応できません。身内に頼ることができないのです。この講演を聞く前から小学校6年生までに母子の信頼関係を築いておくように指導しています。中学生になって道はずれても、Attachmentがあれば、懐

内藤 恵子



にもどってきます。私の考えと同じ意見を、パネルディスカッションの先生方からも聞けて、自信を持って指導できます。また、子供の人生にEffectを与えられる1人の大人になれるよう努力したいと思います。

人間関係の築き方は、獲得する能力で教えてできるようになりません。小学生時代にいろんな人、友達に出会い、つきあって、Attachmentを築ける人間に育てましょう。それが今、私たちが子供たちのためにできることです。



ワークショップ

西村 博子



エリアミーティングに参加して

港町神戸のエリアミーティングは多彩なプログラムでした。午後の部ワークショップは明るい未来のために・・・次代を担う子どもたちに幸せを・・・をテーマにして里親運動に42年間取り組んでこられている兵庫県家庭養護促進協会の橋本明氏の基調講演で始まりました。今子どもたちに出来ること・・・民間の団体としてこれまで2100人の子どもたちがこの里親運動をとおして育てられました。この運動の実践には次の事柄が大切にされてきています。それは、子どもたちは誰かに必要とされ大切に育てられる。そこには大切な人間であり、尊重されるという相手との互いの信頼感の形成が存在する。子どもたちは親や家族のモデルとして学習する機会が与えられる。そしてどのような大人に出会うのか、その出会う大人によって子どもたちは変わっていく。里親は子どもにとってたった一人の大人を見つける運動なのです。

社会が子どもの福祉にどれだけ関心をしめしているか、それは社会の義務。米国の社会では早くからこの里親制度があります。そういえば、日本の学校で英語や文化を教えていた米国人の先生たちは、自分たちの子どもたちと共にさらに二人の子どもたちを里親として育てられていました。20数年前のことですが、当時の私はそのことにある感銘を受けていました。日本でも近年専門里親制度が発足しています。他人の苦しみ、悲しみ、辛さに無感覚な人の多い社会は貧しい。自分の暮らしと結びつけて出来る発想が豊かに育っていく社会が幸せになれる社会。この子どもに出会って本当に良かったと言える里親になってもらいたい。そういう大人を生かしていくのも自分たちの役目ですと講演を結ばれました。

引き続き4分野からパネラーによる発題がありました。保育の現場から、こどもの精神医療の臨床現場から、教育

の現場から、小児科医の医療の現場から各  
 ゾンシャンによる興味深い発題でした。児童虐待はここ4年間で3倍になり1年間に3万件に上るといふ。子育ての悩みはつきない。学校現場では学力低下を背景に、不登校、イジメ、学級崩壊そして家庭での児童虐待。なぜこのような問題が出てきているのか、私たちはその背景にある事柄を学びました。心のやまいの子どもたち。バブルがはじけ核家族化、少子化、高齢化、価値の多様化と私たちをとりまく社会の変化と現状が次々と報告されました。

こうした多くの諸問題が現存する社会の中で、親の子育てとともに、子どもたちが親以外のいろんな人たちとも出会って、信頼を受け育っていくことで、子育ての修正は充分なされるということは心強いです。地域の中で、社会全体で子どもたちを育てていくという社会でありたい。子どもたちの未来のために、私たちの未来のために、そういう社会であるために、今自分が、私たちゾンシャンが何ができるか、そういう思いをもって考え、各々が学んだワークショップでした。

私事ですが、この春から人との関わりが苦手な子どもたちが学ぶ高校でのクラスボランティアを始めました。子どもたちとの関わりを通して、今何ができるのか、その課題に小さな歩みですが取り組み始めています。

そしてワークショップでの思いをさらに最高潮にさせたのは、夜の懇親会での神戸ワインのご馳走とサンバ。お腹の底に響くサンバリズムにあわせて踊るゾンシャン皆様のお顔は、次の未来に向かって、目標にむかって、輝いていました。ほんと、力いっぱい踊り、楽しみましたね！ありがとうございました！





「歌うことと科学の関連性」講師 米澤傑氏の講演を拝聴して

萩原 謡子



ピアノを演奏することも、スポーツや科学と通じるところがあることは常々感じておりましたが、声楽にも科学的根拠があるというテーマでとても興味深く伺いました。体自体が楽器であることも再認識しました。

『オペラのようにオーケストラに負けないで、小さな声帯から出る声をマイクなしで会場の隅々まで響き渡らせるには、「声楽科学」に基づいた発声方法が大事である。

ポイントは「腰」と「上あご（口蓋）」。

上半身を開放させるために腰を安定させる。そのためには、片足を半歩踏みだし、乗馬の姿勢のように腰椎の辺りを前方に入れ込むと下腹が引っ込み支えが出来る。横隔膜を安定させる。

「上あご」の両奥を斜め上外側後方に広げると舌根部が下りのどの奥がぼかんと開く。

このようにすることにより、上半身は太い筒状態になり声帯に負担をかけることなく声を出すことが出来る。

喉仏は普通高い音になると上がってしまう。しかし、喉で

歌わないことにより高い音になっても喉仏が上がらずにウルトラEの声を出すことが可能となる。』

これらのお話を「カタリカタリ」「サンタルチア」「オーソレミオ」など数曲を実際に歌いながら解説して下さいました。お喋りと歌とでは発声が異なるのでコントロールが大変ですとおっしゃっていましたが、実例付きの解説なのでとても良くわかりました。

人種によって声の出し方も違うというお話も面白かったです。

日本語（演歌）・フランス語（シャンソン）は喉仏が下がる。イタリア語・スペイン語は喉仏が上がって喋り、話し声がそのまま音楽となる。

私たちが電話口で「もしもし・・・」と喋る声は上で喋っているのだそうです。

『私が歌っているときは音符が頭の中を流れていて、次の音を予測して喉を準備している。自分が感情におぼれると人に感情が伝わらないので全体のペース配分をしたり、冷静な計算に基づいて歌っている。ここにも科学が必要です』とおっしゃいました。

また、声のチェンジ点で如何に喉仏が上がらずにコントロールして良い声を出すか、この習得にもやはり科学的計算が必要とのことでした。

科学に基づいたテクニックとその人が持つ磨かれた感性の両方が備わって初めて人を感動させる演奏が出来るのだということが良くわかりました。

これから、声楽を聴くときはそのような観点からも聴いてみることに致します。



“女性の地位向上”

辻 康子



— 思いつくままに —

“女性の地位向上”と言っても“女性”という枠でひとまとめにできるものではなく、結婚しているか。就労しているか、子供を持っているかなどにより、さまざまな生き方があるので、就労などによる経済的自立だけを地位の確立の判断基準にするのは好ましくないように思います。これを保障するのは夫婦財産の共有でしょうが、男性がこの意識を持つことが必要で、“食わせ養ってやっている”という意識を改革しなければならないでしょう。

さまざまな制度的な改善は、とても重要と思いますが、女性が担ってきた出産、育児への評価を高める為に父親の育児参加を促したり、家事労働の再評価など女性、男性共に人間としての女性に対する敬意、尊厳を重んじるべきだと思います。母性だけを女性評価の基準にするのではなく（嫁は子孫を作る道具ではないなど）、人間としての存在を評

価すべきです。

又、仏教、キリスト教といった大きな宗教で一般的に女性は男性より罪が大きい（アダムよりエバが先に罪を犯した）、不浄の者であるという考えが特に発展途上国で浸透しているように思います。日本の角界で女性が土俵に上らない、というのがそのひとつかと思いますが、伝統文化との兼ね合いで難しい点があるとは思いますが、そういった宗教者の意識改革が必要ではないでしょうか。

教育を受ける権利、政治に参加する権利、就労する権利、制度的には日本では随分整ってはきていると思いますが、家事労働、育児などでの負担が圧倒的に女性にかかっている現状では、女性が能力を充分出し尽して社会参加をするのはまだまだ難しいのかもしれない。



女性と健康講座（17年2月19日）：ご報告

田中 茂美



## 「女性のためのメンタルヘルス 夏目誠先生ご講演」

近年、社会構造の複雑化、多岐に亘る合理化効率化が目覚しく進むなかで一際目を引くのは、さまざまな「過剰ストレス」に対処できず社会から取り残されたり、疎外感を強くもつ「こころの過労」状態の人々が年々増え続けていることでは無いでしょうか。年毎に自殺者の数は増え続け16年には3万4千人を超え、交通事故死の3.7倍になりました。引きこもり人口は約40万人、そのうち中学生以下は12万人といわれ、これらは一方向に減少する様子がありません。「こころの病」については、特に近年うつ病が多く、マスコミ等でも取り上げられているにも拘わらず、いまだに誤解や偏見が根強く存在し、予防、治療への橋渡しといった対応面で多くの課題を抱えている状況にあるといえます。「こころ」だって風邪をひきます。早期治療が効を成すことも多いのですが、本人の「気づき」がなかったり、周囲の対処が悪いとこじれて長引くこともあります。身近な病気となってしまった「うつ」についての理解を深めることが「こころの病」への対処の第一歩と考え、「メンタルヘルス」に関して関西では第一人者の松蔭女子大学教授（精神科医）夏目誠先生に今回のご講演をお願いいたしました。以下ご講演内容をご報告いたします。

；この講演は一般論で、現実には個人個人により微妙な差がある点、ご了承下さい。

心の病気には、内科や外科のように検査数値等のバロメータになるものがなく数量化できず、どのくらい状態が悪いか等の表現が大変難しい。目に見えず、基準となる物差しが無いと、周囲にとってイメージができないことが多く、それが誤解や偏見を招く一因となっている。「うつ」をはじめとして「こころの病気」になりやすい人は真面目で几帳面で頑張り屋の優等生タイプが多い。「皆と一緒にしないで」「人よりぬきんでていなくて」「私は優秀なんだから」という自分自身に枠をはめ込んだ考えから抜け出せず、プライドも高い反面、甘えや依存性も高い。事例1は親の過剰な期待にこたえ自慢のいい子と思われるよう努力してきたのに毎日が愉しくない女学生のケース。友達もいない。親の言うとおりにしてきたのになぜ幸せで無いかと「うつ」になった。事例2は、証券会社勤務の20代のエリートキャリアウーマンであるが対人関係でつまずいて過食症になる。対人関係悪化原因は上司の姿に几帳面で干渉的で自分のことを認めてくれない父親の影をみていたから。対人関係トラブルの心のカラクリは置換。事例3は明朗仮面うつ病の新入社員。明るさを過度に演じていなければ周囲に認められないと常に家族や他人の目を意識しているが、反面、敏感で感受性が強く傷つきやすく、他者の評価に過敏に反応するケース。現代は「自己愛」の時代といわれている。強い自己愛故に他人に認められたい、受け入れられたい、誉めて欲しい、羨ましがらせたいと言う欲求が大きく、無意識のうちに自己愛の欲求がコントロール不可能な状態となり「こころの病」を招いている若者が増

えてきている。一般に今の若者の心の構造の特色として自己愛が強く他者評価に過敏に反応し、傷つきやすく人格否定されたとまで思うこともありそれが「うつ」や「引きこもり」のきっかけになることが多い。このことは、人（親）に受け入れられ、愛される体験が少ないことによる。幼児期に満たされなかった心の空白を満たす故の自己愛とも解釈できる。よって、私たちの世代の若い頃を振り返って同じ基準で今の若者を理解するには当然無理が生じる。50代が27歳を理解しようとするなら自分自身の27歳頃-5歳=22歳頃、40代が27歳を理解しようとするなら27歳頃-4歳=23歳頃の価値観を想定するとほぼ間違いない。切れやすい指数も高くなってきており要求不満耐性は4割以上低下している。自己愛の塊で切れやすい若者世代を育てたのは他ならぬ今の中年以降の世代であることは間違いのない事実であり、おおいなる反省が必要である。

次に事例4として「空の巣症候群」の中年エリートキャリアウーマン。社会的地位も経済も安定し子供も巣立って行き夫と二人暮らしになったが、更年期障害による体調不良と夫との時間の空虚さに耐えられなくなり「うつ」となったケース。川柳や流行歌の歌詞がなぜ多くの人々の心を捉えるかと言うと、人生の「こころの移ろい」の真実が含まれ共感を得るからである。「うつ」は過剰ストレス状態に陥っていて「木を見て、森を見ず」の状態であり、全体が見えず部分や個々にとらわれて硬直化した考え方に陥っており、視野狭窄の状態といえる。不安、イライラや焦り、全体が把握できない心理状態となるときは、情報不足、親しい人が居ない、初めて体験である等のことが多くこのような場合は情報を入手し流れや本音を捉えて優先順位を付けていくと、過剰ストレスを克服できることがある。男性

心の深い部分(深層心理)に、  
目を傾けてみよう!

心声を聞こう!!  
体が悲鳴を上げているよ!!  
無理をしてはいけないよ!  
症状はバロメーター、  
警報なのだよ...



の特色として過剰ストレスに対し「これくらい、がんばる、突っ張る」で突き進み「ダメだ！」で結果として自殺やストレス病が見られ、女性の特色として「しんどい、助けて、もうダメ」でブレーキがかかり結果として開き直りが見られる。女性の自殺はほとんど無い。中年以降の男女差は大きい。

過敏性大腸炎、アトピーの悪化、病める肩こり頭痛等はこのころの深層心理を反映した体の悲鳴である。これらは、薬に余り反応せず長期間続くのが特徴である。また、体にブレーキがかかる時は会社や学校に行こうとしても体が動かないこともあるが、これは、頭で分かっているが感情、気持ちが納得していないためである。この時は無理は禁物である。

身近なストレス解消法として①緊張する場所から離れる。②軽い運動をする。③土曜は休息、日曜は趣味等で気分転換のリズムをとる。④おしゃべり、感情発散、共感ができる。⑤自然と親しむ。⑥子供心に帰る等の休養や心のエネルギーの充足をすることを生活リズムとして取り入れることが良い。ストレスにより睡眠等の生活リズムが狂ったら、先ず悩むより生活リズムを正常に無理にでも戻して日常を過ごせば、過剰ストレスによる心の不調も元に戻りやすい。

以上、夏目先生には分かりやすい事例や川柳、歌等も取り入れたパワーポイントにより、有意義なご講演を好評のうちに終えることができました。当日、雨の中、当クラブ外からも多くの方々の御臨席を頂き、主催者側一員として誠にありがたく存じました。

# 簡易ストレス解消法

- まず、緊張する場から、離れてみる。トイレ雑用などで
- リラックス法、リラックス体操を試してみる
- 昼休みに、軽い運動を
- 休日は土曜日は休息、十分な睡眠
- 日曜日は好きな事、没頭できる事をして気分転換を
- おしゃべりができる事、自己開示、コミュニケーション、感情の発散、共感こそ
- 自然と親しむ
- 子ども心に帰る



## 3月の卓話

### ゾンタと国連

国連の創設（1945年10月24日 国連憲章発効、同日正式に発足）以来、国際ゾンタは国連と密接な関係を持ち、国連の活動に協力して来た歴史を持っている。ニューヨーク、パリ、ジュネーヴ、ウィーンに駐在する国際ゾンタによって任命された代表は、各地の国連機関の会議に出席し、会員に情報を提供すると共に、国連に対し、指導的地位にある女性として“専門的見地から”女性の人権、女性の地位向上に関係するさまざまな重要な提言をして来た。経済社会理事会（ECOSOC）では、1963年以来諮問的地位を認められて来たが1985年にはNGO委員会より最高評価カテゴリーIの諮問的地位に推薦され、認められている。また国連教育科学文化機関（UNESCO）、国連児童基金（UNICEF）（1972年より）国際労働機関（ILO）

## 宮本 典子

（26地区2004～2006国連委員長）



（1975年より）においても諮問的地位が認められている。1983年ヨーロッパ会議の諮問的地位が認められ、ストラスブールにも代表をおいている。その中で国連児童基金（UNICEF）、国連女性開発基金（UNIFEM）、国連女性の向上のための国際調査訓練研究所（INSTRAW）、国連中近東におけるパレスチナ難民救済活動基金（UNRWA）等、国連に附随する機関や組織に協力して多くのプロジェクトを援助して来た。

国際ゾンタの目的には女性の法律的、政治的、経済的、教育的、健康的、地位の向上をはかるとあり、各年度の活動目標と奉仕プログラムにはこれに密接に関連している国連のプログラムの実施が組み込まれている。今期、2004～2006年の国際奉仕プロジェクトは、ニューヨーク



国際大会で確認された我々の使命とゾンタの目的にもとづき、新規の①ニジェールのHIV/AIDSに感染した女性に対するマイクロクレジット（ケア/インターナショナルによるメタマステュブラ計画）支援と②ボスニアヘルツェコヴィナの人身売買禁止BATCOMプロジェクト（スターネットワークオブワールドラーニングを通じたゾンタ独自のプロジェクト）、③アフガニスタンの女性救援プロジェクト（前年度からの継続でアフガニスタンの女性学習施設建設とアフガニスタン母体及び新生児の破傷風予防キャンペーン/ワクチン注射があげられているが、①、②はすでに前年度までに採択され実行に移されて来ている国連の女性に対する暴力禁止条例（ZISBAW）と健康増強のプロジェクトの一環であり③もまたユニセフによって施行されているプロジェクトの一つである。

ニューヨークの大会ではこれまでの世界大会で採択された決議の原則によって今後の行動目標が確認されているが、この原則とは

- ①女性の割礼に反対する決議（1994年デトロイト）
- ②ゾンタと国連のパートナーシップに関する決議（1996年セントルイス）
- ③女性と子供に対する暴力撲滅への国際ゾンタの戦略（ZISBAW）に関する決議（1998年パリ）
- ④女性に対するあらゆる種類の差別撤廃条約およびその補足議定書を推進する決議（2000年ホノルル）
- ⑤国境なき組織犯罪に対する国連協定を補足し人身売買（特に女性と児童の）を防止弾圧、処罰する議定書をする決議（2002年ヨーテボリ）
- ⑥HIV/AIDS（エイズ）に対する認識、予防、および治療を推進する決議（2004年ニューヨーク）などである。

ヨーテボリ大会での議決案「組織的多国籍犯罪に対する国連憲章」の追加項目である、特に女性、児童人身売買防止、禁止、処罰の「議定書」（2000年11月の国連通常総会で採択された）を促進する決議案を少しくわしくのべるとゾンタは、具体的に

- ①議定書の内容を勉強することにより効果的な支援運動を準備する
- ②議定書を批准する様、自国の政府に支援活動をする
- ③他NGOと協力して議定書が施行されているか自国政府を監視する
- ④人身売買の需要を防止し、特に親、保護者、教育、医療、法取締の役人、潜在的犠牲者の意識を高めるための支援活動を行う
- ⑤人身売買を防止する真剣な努力の大切さを力説すると国連の憲章/議定書が実行されているか各国で活動を展開することが述べられている。2002～2004年の国際プロジェクトはボスニアヘルツェコヴィナの女性人身売買防止プロジェクトとアフガニスタンの母体および新生児の破傷風予防注射プロジェクトがあげられている。

2000～2002年の国際奉仕プロジェクトではUNIFEMとの連携プロジェクトでインドの女性に対する暴力防止、同じくUNICEFとの連携でブルキナファソのFGCを支援、UNICEFとの共同でネパールの新生児破傷風予防注射を実施して来た。1998～2000年にはブルキナファ

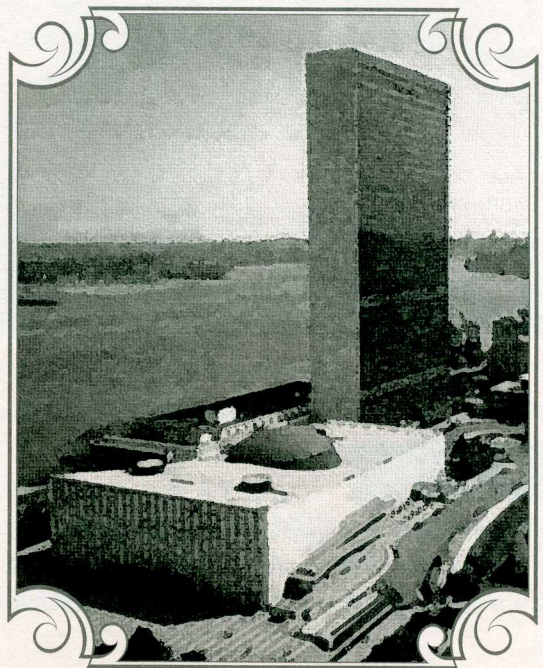
ソの女性の割礼防止プロジェクト（ZISBAW-女性と子供に対する暴力根絶のための戦略の一環）、1996～1998にはUNICEFと協力して南アフリカの女子教育に対する助成、そして1994～96ではグアテマラと中米で女性の職業訓練プログラムのUNIFEM部分を担当し、UNIFEMと共同でセネガルでの果物、野菜、魚の生産、加工、販売技術改善と女性の経済自立プロジェクトを支援して来た。

1992～94年にはガーナの女性に対する啓発活動（信用貸し）、チリの女性の組合による商業活動支援し、インド、スリランカ、バングラディッシュの女性達に殺虫剤の安全についての学習をした。トーゴの若い女性達への農業従事支援など様々なプロジェクトが国連女性開発基金（UNIFEM）国連児童基金（UNICEF）国連女性調査研究所（INSTRAW）国連教育科学文化機関（UNESCOユネスコ）と協力してなされて来た。

又ゾンタのクラブカレンダーでは、国連との関係でゾンタはカレンダーの中で国連のいくつかの記念日を共に祝うことにしている。それらをあげると、

- 3月8日 国際婦人デー（ゾンタローズデー）  
International Women's Day
- 4月7日 世界保健デー  
World Health Day
- 6月5日 世界環境の日  
World Environment Day
- 9月8日 国際識字デー  
World Literacy Day
- 9月第3火曜 国際平和の日  
International Day of Peace
- 10月1日 国際高齢者の日  
International Day of older persons
- 10月24日 国連記念日  
United Nations Day
- 12月10日 世界人権の日  
Human rights Day

（1998年のその日、世界人権宣言の50周年が祝われた）







4月16日(土)、阪急芦屋川駅近くのイタリアン・レストラン「ベリーニ」で例会と昼食をすませた後、芦屋在住の会員の方が準備して下さった車3台に分乗し、ヨドコウ迎賓館→谷崎潤一郎記念館→芦屋浜ヨットハーバーを見学しました。あいにく桜の満開は数日前に過ぎましたが、春の息吹を感じながら芦屋の街をのんびり散策しました。

ヨドコウ迎賓館は、アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトの設計により、大正末期に神戸灘の酒造家山邑家の別荘として建築され、戦後に淀川製鋼所の所有となった建物です。愛猫家の会員T・Sさんが「こんなに広い鴨居があったら我が家の猫ちゃんが喜んで歩き回るね」と思わず感想をもらすほど、優雅で贅沢な細工が各所に溢れていました。

谷崎潤一郎記念館には20年余りに及ぶ関西での生活と作品の資料が集められており、小説「細雪」の4人姉妹は、谷崎潤一郎氏が49歳で結婚した妻松子の4人姉妹がモデルであったこと、関東大震災後、地震が怖くて関東から関西へ、そして晩年は熱海へ移動し、79歳で亡くなるまでの自由で豪華な暮らしぶりを知りました。この移動例会から1か月後、NHKの深夜番組で昭和30年代の対談番組に

出演した晩年の谷崎潤一郎氏が小説や人生の話よりも京料理の話が一番楽しそうに語る姿を見て、本当に生涯悔いなく幸福に暮らした芸術家だと実感しました。

大正から昭和にかけて、芦屋に造られたモダンな建築物と生涯をモダンに生きた作家の人生に触れ、芦屋のモダンズムを堪能した1日でした。そして、芦屋は、山も緑も海もある自然と文化に溢れる街でした。



予告



## 大阪Ⅱゾンタクラブ チャリティーイベント



「神谷徹

ストローコンサートと

花外楼秋のお弁当」

◆2005年11月19日(土)

11時～12時過ぎ演奏

12時半～お食事

◆アイルモレコタ

◆チケット代 8,000円

## 編集後記

2年間広報委員をさせて頂きまして今回が最後の号となりました。肩の荷がおりたような、淋しいような複雑な気持ちです。会員数が少ない中、皆様一人一人が意欲的に原稿を書いて下さったので、苦勞なく発行する事が出来ました。色々な事を思い出しますが皆様と遠足気分で広報委員会を開催出来た事は忘れられない思い出です。御協力ありがとうございました。